

ayne ipa siri ne aan hawe anu wa po hene, aruska.

ora “ akotánu un nispa, iyerampokwen a nispa póka, sóne siknu wa an hawe he an? ” sekor yaynuan.

easir ikemnu yaynu aki kor, asinuma anak nep aesírkirap ka somo ki no, ánan ruwe, ne kusu, tapne wenpurikor apoho macihi, iyos ek a hi aeyáysukupka oruspe aye hawe tapan na.

sekor síno katkemat hawean ruwe ne.

uwokpare p uwepeker, tap, kuye wa kókere hawe tapan na. ous suy, takne, aokúnure pon isoytak kuye kusu ne.

UIRWAKNE PON MENOKO MATAKIHI IRARA RUY ORUSPE ISOYTAK

1955年8月30日録音

(asaha) asaha an híne okaan pe ne hike, asaha turano tun ane patek, ene iki wa okay pe ane hi ka aerámpéwtek no, uheturastean híne okaan.

pe ne hike, tane asaha ka poro. asinuma ka pon menoko ane híne, tun ane wa okaan. a p, kesto an kor, kunneywano, akor sápo, ipe oka an kor nani suy kannu su atte wa, poro su ani sayo kar wa, kor wa hunak un soyne ranke, soyne ranke.

aoyámokte kor ánan pe ne akusu sine an ta, asaha, hunak un su kor wa arpa hi kusu aokápikuyra híne arpaan akusu, too, (i) ponno ipanake ta tek, auníhi karankeno, to an pe ne a p, ne (tok) to teksam ta, néa su kor wa arpa híne, asi híne oraun, ene hawean hi. “ kokkanosapo! kokkano-sapo! ” sekor kane, asaha hotuypa.

akusu, ene sirki hi. to noski sipuni sipuni kane híne, to noski wa poro terkeype, ma híne yan híne, ya ta yan híne, néa poro su or oma sayo, oro néa terkeype oahun híne orano e a e a e a kor an kor, asaha néa su hocinuturkuste wa as wa an. kor néa terkeype néa sayo e aye okere kor ora suy, hetopo, poro hon pisese kane an sirihí, suy hetopo, to or un copiyán tek.

siri anukár hi kusu ora, asaha inukar kuni aekímatek kusu nani, hetopo kiraan híne auní ta ékan híne husko an pe asikópayar híne ánan. akusu asaha ek híne, okaan.

ちに、私を見つけたのだなあと思われる話を聞いて、私はいっそう、腹が立ちました。

そして「私の村の村長さん、私を憐れんで下さったお方だけでも、本当に生きておられるのかなあ。」と思いました。

本当に気の毒に思いながら、私は何の不自由もしないで、暮らしていますので、このように素行の悪い息子の嫁が、私のあとを追って来たことを、つらく思ったことを、お話しいたしました。

と立派な奥様が言いました。

親不孝者の昔話を、今、語り終えたのでございます。続いてまた、短い、あきれた小さなお話を語ります。

若い姉妹の妹のほうが いたずらがひどい話

姉と私と一緒に暮らしていました。姉と二人っきりで、どういういきさつでこうしているのかも、わからないまま、一緒に暮らしていました。

けれども、もう姉も大きくなり、私が若い娘になって、二人して暮らしていました。ところが、毎日毎日、朝早くから、姉さんは、食事がすむとすぐ、また、なべをかけて、大きななべでおかゆを作って、持って、どこかへ出かけて行きます。

私はおかしいなあと思っていたのですが、あるとき、姉がどこかへ、なべを持って行きますので、私はあとをつけて行きました。すると、ずうっと、少し川下寄りのところに、私達の家の近くに、沼があったのですが、その沼のほとりに、そのなべを持って行って、置いてそれから、こう言いました。「コッカノサポー！ コッカノサポー！」というように姉が呼びました。

するところになりました。沼のまん中がボコボコ盛り上がり、沼のまん中から大きな蛙が、泳いで上がって来て、陸に上がって来て、さっきの大きななべに入っているおかゆの、その中にその蛙が入って、そしてパクパクパク食べていると、姉はそのなべを両足の間にはさんで立っていました。その間、その蛙はそのおかゆを食べていて、とうとう食べ終わると、また逆もどりして、大きなおなかをふくらませている様子で、またもどおり沼の中へポチャンと飛び込みました。

その様子を見ましたので、姉に見つかってはたいへんですから、すぐまた逃げて家に帰ってきて、もとのとおりにして(＝何くわぬ顔をして)いました。すると姉が帰ってきて、一緒に暮らしていました。

orano suy, néno, kesto asaha iki kor an, ayne suy, sine an ta, asaha ekimne, nína kusu ekimne híne oar isam hi kusu, asaha ene iki wa anukár hi ne a kusu, poro su ani sayokar'an híne, pop híne tap, pop wa ayanke sayo akor híne, arpaan híne, néa (to teksarum . . .) to teksam ta arpaan híne, “kokkanosapo! kokkanosapo!” sekor, hawean akusu, to noski sipunipuni.

hemanta yan (híne,) akusu, néa síporo terkeype ne híne, yan híne, néa su or un terke, su or osma wa, ipe kusu ne a p, tap ayanke su pop su ayanke wa akor wa arpaan hi ne kusu, rayhocikacika kor, néa terkeype hetopo su or wa osirpittektek. ray anki an siri apuunno to or ene híne arpa.

aemína a aemína a aemína a híne, oraun néa su, néa to or un akutá tek híne ora akor híne ékan. su ahuráye híne, ora mosmano ánan. nen ka iki ka somo ki no an pe katun aki híne ánan.

akusu akor sápo iwak híne suy, (néa,) rewsí okaan kunneywa an kor, néa su, suy sanke híne, suke, sayo kar. poro sayo kar híne, kor híne suy, ran híne, néa to ya ta arpa híne, su asi híne orano, “kokkanosapo! kokkanosapo!” sekor hawean akusu, néa to noski un háwas hawe ene an hi. “ene anayomne! ene anayomne!” sekor háwas. akusu ora, akor sápo, pasrota a pasrota a kor ek hawe as.

hetopo suy os aokápikuyra a korka kiraan híne auní ta ékan híne husko an pe asikópayar híne ánan akusu, asaha ahun. (hin . . .) su ani kane híne ahun híne orano ikopasrota a ikopasrota a.

“awenmatakihi, eyki katu pirka a ciki enepo easir, akamúyhokuhu ene hawean hi he an? nen ka an hoiyo eki aan wa kusu ene, akamúyhokuhu yomne yak ye hawe ne kusu epo tasi etura ánan nek! tane kiraan^{註)} wa, eoyakke un nei ta ka arpaan wa ánan kusu ne na sinenne an!” sekor, akor sápo hawean kor, kor wa an pe, ukomuymampa opitta kor pe anak opitta, ukosuppakar híne, se híne to hunak un soyne wa arpa wa isam.

okake ta sinenne ánan ruwe ne wa. akor sápo, poro su ani suke wa, terkeype koyani hi, aemína rusuy kusu, pop sayo akar wa akor wa ránan wa ne terkeype, ahocíkacikare wa eyomne wa asaha ka isawot wa isam sekor an isoytak aye hawe tapan.

sekor, imatakne pon menoko hawean ruwe tapan.

注) 語り手の Wateke さん自身、あとでテープを聞いて、kiraan (kira «(恐れて)逃げる»)ではなく、ikesuy'an (ikesuy «(怒って)出ていく»)というべきだった、と言っていた。

それからまた同じように、毎日姉はしていました。そしてまたあるとき、姉が山へ行きました。薪とりに山へ行って留守でしたので、前に姉がしたのを私が見たとおりに、私は大きななべでおかゆをたいて、煮立って、たった今、煮立っておろしたばかりのおかゆを、持って行って、あの沼のほとりに行って、「コッカノサポー！ コッカノサポー！」と言いますと、沼のまん中がボロボロ盛り上がります。

へんなものが岸が上がって来ましたのを見ますと、あの巨大な蛙です。それが岸に上がって来て、そのなべの中にピョンと跳んで、なべの中に入って、食べようとしたんですが、今おろしたばかりのなべ、煮立ったなべをおろして、持って行ったのですから、ひどく身もだえして、その蛙はまた、なべの中からぬけ出しました。今にも死にそうな様子で、しずかーに、沼まで這って行きました。

私は笑って笑って笑って、それからそのなべの中身を、その沼の中へパッとあけて、それから、持って帰りました。なべを洗って、それから黙っていました。何もしないでいたふりをしていました。

すると姉さんが山から帰ってきて、また、(あの)一晩過ごし、翌朝になると、あのなべをまた出して、炊事しました。おかゆを作りました。たくさんのおかゆを作って、持ってまた沼へ下りて行き、あの沼の岸まで行って、なべを置いて、それから、「コッカノサポー！ コッカノサポー！」と言いました。すると、その沼のまん中の方で、こんな声がしました。「あんなにこりたことー！ あんなにこりたことー！」という声がしました。すると今度は、姉さんがののしりながらやって来る声が聞こえました。

私はまた、姉のあとからこっそりついて行っていました。逃げて家に帰って、もとのとおりにして何くわぬ顔をしていますと、姉が入って来ました。なべを持って入って来て、それから、私をさんざんののしります。

「とんでもない悪い妹、おまえのやり方がよかったなら、こんなに、私の神様の夫が、あんなことを言うものか。なんらかの悪事をお前がしたからこそ、あのよう、私の神様の夫が、こりたと言うのだから、もうお前と一緒になどいるものか！ 今、私は逃げて、お前のいないところへ、どこかに行って暮らすから、一人で暮らしな！」と、姉は言いながら、持っているものをかき集め、全部、持ち物は全部、荷作りして、背負って、遠くどこかへ出て行ってしまいました。

そのあとに私は一人で暮らしているのです。姉さんが大きななべで煮炊きして、蛙に持って行って食べさせるのを、私は笑ってやりたくて、煮立ったおかゆを作って、持って沼へ下りて行って、その蛙を身もだえさせて、蛙がこりて、姉も逃げて行ってしまった、というお話を、語ったのです。

と、妹のほうの若い娘が言いました。

(tapan) tapan takne uwepeker anakne, uirwakne, usakor pon menoko oka wa, imatakne hike earkinne irara p ne híne, sáha ene iki hi okunure kusu, sések sayo to sam ta kor wa ran wa, ne aipére terkeype, yáni ray wa, yomne oruspe, isane p ruska kusu ikesuy a ruwe tapan sekor irara imatakne p kor isoytak an ruwe tapan sekor an pe tap kuye okere hawe ne na.

UMUREK UTAR AOKUNURE ISOYTAK

1955年9月3日録音

pirkano sóne itak ipehe oma nankora?

síno nispa, ahékóte híne okaan pe ne hike, ahokú-nispake ka ison wa, easir, nep akor rusuy ka somo ki. asinuma ka, yuptek menoko ane p ne kusu, usa toyta haru, kina haru, poronno akar wa, ahokúhu nispake ka, ison pe ne kusu, kam hene, cep hene, kina haru hene, ae rusuy ka somo ki no, uheturastean wa, uwepirkaan kor, okaan pe ne korka, ukoposakan wa, tan pe patek, aerámu ka pékamam kor okaan pe ne.

orano, ene an nispa akor pe ora, po sak no okaan hi, ka aruska kusu, “hokure kunak, taa akotánu pánake ta, inne kotan an. kotan noski ta, kotan-kor-kur, (si . . .) tu matnepo kor wa, poniwne hikehe, na hoku sak no an yak aye na, ne wa an pon menoko, eyayetunkar yan.” sekor, kesto an kor aye kor, ánan. “nen póka, ponmatkor’an yakne, ukopokor ruwe anukár yak, ikoyyomap póka, aki kusu ne na.” sekor, haweanan kor, (ana . . .) ponmatkor kuni aekóorsutke, kor okaan hike ka, eun yaynu ka somo ki. ruwe ne ápekor an wa okaan ayne, kanna kanna aye hi ora, néa ipanake un kotan or un san híne isam. ayne, ponmatkor a wa ne noyne, tu cup ka re cup ka, ek ruwe ka oar isam. híne síran.

ayne ora easir, ek híne, orano suy, iramante kor okaan ruwe ne ayne, suy, “hokure hokure sap yan.” sekor an pe, aye híne, san híne suy, sine pa riya isam. a p ora suy hosipi wa ek híne, suy, iramante, auníhi yayouste wa, iramante kor okaan ruwe ne a p, sine an ta san ruwe ne a p, orowano, tu pa ka re pa ka ek ruwe ka oar isam.

inuan akusu, “tane, pon hekaci ukokor wa, pastetterke kor an ruwe ne.” sekor háwas. anu hike, “hinakke kusu, ikoyyomap póka aki rusuy kusu,

この短い昔話は、きょうだい、姉妹の若い女性がいて、妹のほうが、たいへんいたずら者で、姉のやり方に驚きあきれたので、熱いおかゆを沼のほとりに持って下りて行って、その食べさせられた蛙が、もう少しで死にそうになって、こりたことを、姉のほうが怒ったので、出て行きました、と、いたずら者の妹のほうが、彼女自身の話をしました、というのを、ただいま私は語り終わったところです。

夫婦のあきれた話

よく本当の話の内容が入っているでしょうか(=うまく録音できているでしょうか)?

私は立派な長者の奥様になって、一緒に暮らしていましたが、主人も獲物がよくとれて、私達は何も欲しいとも思いません(=何の不足もありません)。私も働き者の女ですから、畠の作物とか、野草とかを、沢山とり、主人も獲物がよくとれるので、肉でも、魚でも、野菜でも、食べたいとも思わず(=何も食べ物に不自由せずに)、一緒に幸せに暮らしていたのですが、二人の間に子供がなくて、それだけをつらく思っていました。

それから、こんな長者を夫に持っているのに、子供がなくて暮らしていることが不満なので、私は夫に「さあどうぞ、すぐその、私達の村の下流の方に、人が大勢住んでいる村があります。村のまん中に、村長さんが二人の娘さんをもっていて、年下のほうの娘さんは、まだ夫がないそうですから、その娘さんを、お嫁にお迎えなさい。」と、毎日毎日言っていました。「どうにかして、妾をお持ちになって、お二人の間に子供ができるのを見ましたら、私はせめてその子をかわいがりますから。」と言いながら、私は夫に妾を持つように勧め、私達は暮らしていました。でも夫は、そんなことは思いもよらないというような顔をしていました。そのようにして、何回も何回も言い続けていましたら、夫はその下流の村へ下りて行ってしまいました。そうしているうちに妾を持ったらしく、二か月も三か月も、全然帰って来ませんでした。こうして日が経ちました。

そうしていたところ、やっと夫が帰って来ました。それからまた夫は狩りをして、しばらく一緒に暮らしていましたが、また、私は「さあ早く(下流の村へ)下りておいでなさいませ。」と言い、夫は下りて行って、また、一年以上越してしまいました。それからまた夫は帰って来て、また狩りをして、家に落ち着いて、狩りをして、私達は一緒に暮らしていました。けれども、あるとき下りて行きましたところ、それから二年経っても三年経っても帰って来ません。

聞くとところによると、「もう、小さい男の子が生まれて、よちよち歩きしています。」ということです。それを聞きますと、私は、「せっかく、せめてその子をかわいがりたいため